

## 「なりすまし」

フィリップ・K・ディック

山口晋平 訳

「近いうちに休暇を取ることにするよ」 スペンス・オルハムは朝食の際に言った。彼は妻の方を向いた。「漸く休めるよ。10年ってのは長いね」

「あの『プロジェクト』はどうするの？」

「戦争は僕がいなくても勝つだろうさ。僕たちの土くれの塊はさほど危機に陥っているわけではないし」

オルハムはテーブルの席に着くと煙草に火をつけた。

「ニュースマシンは情報を改竄して宇宙人が僕らの真上にまで迫っていると報じている。君は休暇中に僕がしたいことが分かるかい？町の外の山脈でキャンプをしたいんだ。昔一緒に行ったよね、覚えているかい？僕は毒オークにかぶれてしまったし、君はインディゴヘビを踏みそうになっていた」

「サットンの森のこと？」メアリーは食事の終わった皿を片し始めた。「あの森は数週間前に焼けてしまったのよ。知ってるのかと思ってた。急に燃え上がったみたいね」

オルハムはうなだれた。「彼らは原因を調べようとしなかったのかい？」彼の唇は引きつっていた。「もう誰も興味ないんだな。戦争のことしか考えられないのさ」彼は口を噛み締めてあの全体像を思い浮かべた。宇宙人、戦争、そして突起を持つ宇宙船。

「どうして他のことを考えられるっていうの？」

オルハムは頷いた。もちろん彼女は正しい。ケンタウルス座α星から現れた黒く小さな宇宙船は地球軍の船群をいとも簡単に突破した。まるで手も足も出ない亀を置いていくかのように。地球に戻る最後までずっと一方的な戦争だった。

ずっと・・・ウェスティングハウス研究所がプロテック・バブルを発明するまでは。その防護壁は地球の大都市に、そしてついには地球全体を覆った。プロテック・バブルは、実に効果的な守りとして初めて機能した。ニュースマシンが報じたように宇宙人に対する初めての本格的な対抗策だったのだ。

けれども戦争に勝つとなると、また話は違ってくる。あらゆる研究所、プロジェクトでは昼夜通して、際限なく、積極的交戦のための武器といった更なる発展を求めて活動していた。一日中、そしてそれを年単位で。

オルハムは煙草を置いて立ち上がった。「ダモクレスの剣のようだな。僕たちの頭上には常に危険がぶら下がっているのさ。僕は疲れてしまったよ。ただ休みが取りたいだけなんだ。でも誰だってそう思っているんだろうな」

彼はクローゼットからジャケットを取り出し玄関のポーチに出た。オルハムをプロジェクトへと連れて行くシュートという小型自動車ももうやって来るところだった。

「ネルソンが遅れなきやいいんだけど」彼は腕時計を確認した。「もう7時になるぞ」

「車が来ましたよ」メアリーは住宅街の間にある道を眺めながら言った。住宅街の屋根の後ろでは太陽が輝き、光がその重々しい鉛の板に向かって反射していた。その住宅地は静かだった。活動しているのはほんの数人だった。「じゃあまた後でね。残業しないようにね、スペンス」

オルハムは車のドアを開けて滑るように中に入り、ため息をつきながらシートに寄りかかった。ネルソンともう一人彼よりも年上の男がいた。

「それで？」オルハムは小型自動車が発進すると、「何か面白い話でもあったかい？」

「普段通りだな」ネルソンは言った。「少数の宇宙船が攻めてきてね、戦略的理由でまた一つ小惑星を手放してしまったよ」

「僕たちがそのプロジェクトを最終段階に進めればそれも良くなるだろうさ。おそらくそれもニュースマシンがプロパガンダとして報じただけかもしれないが、先月にはもう僕はこの事態全てにうんざりしてしまったんだ。あらゆることが残酷で厳格に見えてくるし、人生に彩りが無くなってしまった」

「君はこの戦争は無意味だとでも？」年上の男が急に口を割った。「精密に設計された歯車の一つなんだぞ、君自身がね」

「こちらはピーターズ大佐だ」ネルソンは言った。オルハムとピーターズは握手した。オルハムは大佐をまじまじと観察した。

「どうしてこんなにも早い時間にここにおいで？」オルハムは言った。「プロジェクトではお見かけした覚えはありませんが。」

「いいや、私はプロジェクトには関係ないんだ。」ピーターズは言った。「だがな、君のやっていることは知っているよ。私自身の仕事は全く別のことでね」

大佐とネルソンの間で視線が交わされた。オルハムはそれに気づいて眉をひそめた。小型自動車はスピードを上げていき、不毛で動植物も一切ない大地を駆け抜け、遠く離れたプロジェクトの建物の始まりへと向かっていった。

「あなたのお仕事とは？」オルハムは尋ねた。「それとも話すのを許されていないとか？」

「私は政府に関わる身でね」ピーターズが言った。「FSA、安全保障を司る部署だ」

「はあ」オルハムは眉を上げた。「こちらに敵の侵入でもありましたか？」

「実のところ私は君に会いにここに来たのだよ、ミスター・オルハム」

オルハムは困惑した。ピーターズという言葉の意味を考えるが、彼にはその意味が全く分からなかった。「私に会いに？なぜですか？」

「私は君を宇宙人のスパイとして捕えにここにやって来たのだ。そういうわけで私はこうも朝早くに目を覚ましたということさ。彼を捕えろ、ネルソンー」

銃がオルハムの脇腹に押し付けられた。ネルソンの手はぶるぶると、どこか投げやりに震えており、顔は真っ青になっていた。彼は一度大きく息を吸い再び吐き出した。

「今殺しますか？」ネルソンはピーターズへと囁く。「今殺すべきですよ。待つことなんてできない。」

オルハムは友人の顔を見つめた。何か話そうと口を開けたものの言葉が出てこなかった。2人の男性が恐怖を抱きながら強張ったしかめっ面でじっと見つめてくる。オルハムは眩暈がした。彼の頭は痛み疲れ切っていた。

「私には何のことか分かりません」オルハムは嘆いた。

その瞬間シュートは地面から浮遊し速度を上げて宇宙空間へと向かった。彼らの下にはプロジェクトの風景が遠ざかっており、次第に小さく、そして完全に見えなくなってしまう。オルハムは口を閉じた。

「もう少し待とうじゃないか」ピーターズは言った。「先に訊きたいことがいくつかあるんだ」

小型自動車宇宙を駆け抜ける中オルハムはぼんやりと前を向いた。

「捕縛は上手くいきました」ピーターズは映像スクリーンに向かって話した。スクリーンには保安局長官の顔が映っていた。「皆の気かりも解決することでしょう」

「何か問題はあったかね？」

「何もございません。奴は疑うこともなく車に乗り込みましたので。私のことも異常事態とまでは考えなかったようです」

「今どこにいるのかね？」

「外に出る途中で、ちょうどプロテック・バブルの内側です。全速力で進行しております。逃亡の危険のある区域は過ぎたと見ていいでしょう。嬉しいことにこの乗り物の離陸ジェットも順調に動いています。もしここで何か不都合があるとするならば—」

「彼と会わせたまえ」長官が言った。彼はオルハムを見つめた。オルハムは手を膝に置いて前をじっと見つめながら座っていた。

「そうか、そいつが例の男か」彼はしばらくオルハムを見つめていた。オルハムは何も言わなかった。そして長官はピーターズに向かって頷いた。「よし分かった。十分だ」微かな不満の表情を浮かべていた。「見たいものは見させてもらった。お前たちは後世に残るような偉業を成し遂げた。お前たち二人には何か勲章が与えられるだろう」

「その必要はありません」ピーターズは言った。

「まだどれほどの危険性があるのだ？まだ機会は残されているのか？あの一」

「機会はあります。けれどそう残されてはいません。私の理解が正しければあれには合言葉が必要になります。いずれにせよリスクは負わなければならないでしょう」

「月面基地に君らが来ることを連絡しておこう」

「いいえ」ピーターズは首を振った。「船は基地を超えた外側に下ろします。危険を冒したくはないですから」

「好きなようにしたまえ」オルハムに一瞥をくれた長官の目が光った。それから彼の映像は消えた。スクリーンにはもはや何も映っていない。

オルハムは視線を窓へと移した。船はすでにプロテック・バブルを通り過ぎていて絶えず一層スピードを上げながら進行していた。ピーターズは焦っていた。彼の下ではジェッ

トの音が低く響きながら無防備にその姿を曝していた。彼らは恐れていたのだ。狂ったかのように焦っていた。オルハムのせいで。

彼の隣の座席の上でネルソンがそわそわとしていた。「今やるべきだと思います」彼は言った。「もし今片づけられるなら何だってやりますよ」

「落ち着け」ピーターズは言った。「君にしばらく船を任せるから私は彼と話そう」

彼はオルハムの横に身を置き彼の顔を覗き込んだ。やがて彼は手を伸ばし極めて慎重に彼に触れた。初めは腕に、そして頬に。

オルハムは何も言わなかった。〈メアリーに知らせることができないか〉彼は再び考えた。〈彼女に伝える方法がないだろうか〉彼は船の中を見渡した。どうやって？あのスクリーンはどうだろうか？ネルソンが操作盤の傍に銃を持って座っているじゃないか。できることは何もない。僕は囚われていて、危機的状況にいるのだ。

けれど、なぜ？

「聞きなさい」ピーターズは言った。「君には聞きたいことがいくつもある。知っての通り私たちは月に向かっていているところだ。1時間後には月の裏側に、荒涼とした場所に下りることになる。私たちが着陸するとすぐに君はそこで待っている男たちに引き渡されるだろう。君の身体は一瞬で破壊されるのだ。理解できるかね？」彼は時計へと目を向けた。「二時間も経たないうちにばらばらになった身体は月面に撒き散らされるのだよ。爪一つ残らない」

オルハムは無気力に言い返した。「教えてはくれないのですかー」

「もちろん、教えてあげるとも」ピーターズは頷いた。「2日前私たちは宇宙人側の船がプロテック・バブルを通り抜けてきたという知らせを受けた。船は人型ロボットのスパイを放った。そいつがある人物を殺してその者に成り代わったのだ。」

ピーターズはゆっくりとオルハムを見た。

「ロボットの中にはU爆弾がある。我々のエージェントはどのようにその爆弾が起動するのか突き止めることはできなかったが、それがある特定のフレーズ、文字列を発話することで起動すると推測した。そのロボットは殺した人物の一生を生き、そいつの日常、仕事、人間関係に潜り込むようだ。奴はその人物の姿を真似るように設計されている。その違いに気づく者は一人もいない。」

オルハムの顔は病的な程に白くなった。

「そのロボットが扮した人物こそス Pens・オルハム、つまりプロジェクトの研究部門の高位局員だったのだ。このオルハムのプロジェクトが決定的な段階にまで迫っていたために、その生体爆弾はプロジェクトの中心へと入り込んでー」

オルハムは自分の両手を見下ろした。「けれど私はオルハムです。」

「オルハムの場所を特定し殺してしまえば彼の人生を引き継ぐことは簡単なことなのだよ。ロボットが船から放たれたのは8日前のことだ。成り代わりは先週末に成された。オルハムが丘に軽く散歩をしに行った時のことだ」

「けれど私がオルハムなんです」彼は操作盤の前に座っているネルソンの方を向いた。「僕

が分からないのか？20年来の付き合いだろう。共に大学に通っていた様子を思い出してはくれないのか？」彼は立ち上がった。「僕と君はあの大学で一緒だった。同室を共有した」ネルソンの方に近寄っていった。

「俺に近づくな！」ネルソンは威嚇した。

「聞いてくれ。2年生のことを思い出してくれ。あの子のことを覚えているだろう？名前は何だったかー」額を擦る。「黒髪の女の子だよ。テッドの家で会った子さ」

「やめてくれ！」ネルソンは怯えながら銃を振り回した。「もうこれ以上聞きたくない。お前は彼を殺したんだ！この・・・ロボット野郎！」

オルハムはネルソンを見つめた。「誤解だ。僕には何が起こったのか分からないけれど、ロボットは僕に接触しなかったんだよ。何かが間違っているに違いない。その船は事故にあったんじゃないかな」彼はピーターズの方を向いた。「私がオルハムです。それは私が知っている。入れ替わりはなかったんです。私はいつも通り何も変わってなどいません」

彼は自分の身体中に手を当てながら確認した。「何か証明する方法があるはずですよ。地球に戻してください。X線検査とか、神経反応検査とかそういった類のものをしてもらえれば理解してもらえます。もしくは事故にあった船が見つかったりするかも」

ピーターズもネルソンも一言も話さなかった。

「私がオルハムなんです」彼は繰り返した。「私のことは私が知っている。証明はできないけど」

「そのロボットはー」ピーターズは言った。「自分が偽物のスペース・オルハムだということに気づいていないのだ。肉体と同じく精神までオルハムに成りきっている。人工記憶システムを持っていて、偽の記憶を想起するのだ。奴はオルハムの姿をして、彼の記憶、思考や興味を再現し、彼の仕事を遂行する」

「けれど一つだけ違うところがある。ロボットの中にはU爆弾が内蔵され、引き金となる文字列で起爆するようにできている」ピーターズは少し離れた。「それが唯一の違いなのだ。だからこそ君を月へ連行している。彼らが君を分解し爆弾を取り除くだろう。爆発するかもしれないが、大した問題ではない。そこだったらな」

オルハムはゆっくりと座った。

「もうすぐです」ネルソンは言った。

彼は仰向けになって必死に考えていた。船はゆっくりと下降していく。彼らの中には窪んだ月面が広がっていた。荒野が際限なく続いていた。自分に何が出来る？どうすれば助かる？

「準備をしろ」ピーターズは言った。

数分の内に僕は死ぬ。下には小さな点が見える。何かの建物のような。建物には解体チームの男たちが僕を細切れにしようと待機している。あいつらは僕を切り開いて四肢を引き抜いてばらばらにするだろう。爆弾が無いことに気づいて驚くだろう。自分たちがやったことを理解する。けどそれじゃ遅すぎるんだ。

オルハムはその小さな部屋を見回した。ネルソンはまだ銃を持っている。あそこは万に一つも好機はない。もし医者の上まで辿り着いて検査を受けられれば—それが唯一の方法だった。メアリーが助けてくれるかもしれない。彼は神経を尖らせ必死に考えた。たった数分に迫っていた。残された時間はほとんどない。彼女に接触できれば—なんとか伝えるんだ。

「慎重にな」ピーターズは言った。船は速度を落とし凹凸のある月面へと接地しようとしていた。そこには音一つなかった。

「聞いてください」オルハムは重々しい口調で話した。「私がスペンス・オルハムだということを証明できます。医者をごここに連れてき—」

「分隊です」ネルソンが指さした。「彼らが向かってきます」彼はびくびくとオルハムを見た。「何も起こらないといいんですが」

「彼らが仕事を始める前に離れるさ」ピーターズは言った。「すぐにここから離れよう」彼は宇宙服を身に着けた。着替え終わるとネルソンから銃を受け取った。「しばらく私が彼を監視しよう」

ネルソンもいそいそと不器用ながらも宇宙服を着た。「奴はどうします？」オルハムを示した。「あいつにも着せますか？」

「いいや」オルハムは首を振った。「ロボットに酸素は必要ないだろう」

男たちの集団がもう船の間近まで迫っていた。彼らは立ち止まって待機していた。ピーターズが彼らに合図を送る。

「こっちだ！」彼が手を振ると男たちが慎重に近づいてきた。膨らんだ服を纏って、固く、生々しい様相だった。

「もしドアを開けたら—」オルハムは言った。「私は死ぬことになります。人を殺すんですよ」

「開ける」ネルソンが言った。そしてハンドルへと手を伸ばす。

オルハムは彼を見ていた。男の手が鋼鉄の棒を握りしめるのが見えた。一瞬のうちにドアは揺れ、船内の空気が一気に漏れ出るのである。死んでしまうのだ。やがて彼らは自分たちの過ちに気づくのだ。恐らくこういう時世でなければ—戦争さえなければ—男たちはこういった行動を取りはしないかもしれない。自身の恐怖から一人の人間を死に急がせたりしないかもしれない。皆怖がっているのだ。集団を襲う恐怖からある一人の人間を犠牲にしたがっているのだ。

彼らに自分の罪を認識する余裕が無いが故に僕は殺されようとしているのだ。十分な時間がなかったのだ。

彼はネルソンを見た。ネルソンとは何年も友人だった。彼らは共に学校に通った。結婚の時には友人代表にもなってもらった。今ネルソンは僕を殺そうとしている。けれどネルソンは悪くない。彼のせいなんかじゃない。時代が悪いのだ。恐らくペストの時代も同じような状況だったのである。斑点が現れた人々も同じように殺されたのだ。僅かな抵

抗をする暇も無く、証拠も無しに、ただ疑念のみで。危機的な時代にあっては他にどうしようもないのだ。

オルハムは彼らを責めることはなかった。けれど彼は生きなければならなかった。彼の生命は生贄になるにはあまりに貴重な存在だった。オルハムは思考を迅速に張り巡らせる。自分に何ができるのか？何かないのか？彼は周りを見渡した。

「開けます」ネルソンが言った。

「あなた方は正しい」オルハムは言った。彼は自分自身の声に驚いた。それは絶望から生じた抵抗だった。「私に空気は必要ない。ドアを開けるといい」

彼らは動きを止め、しげしげと慎重にオルハムを見た。

「どうぞ。開ければいい。大したことではない」オルハムはジャケットの中に手を隠した。

「あなた方2人はどこまで逃げられるかな」

「逃げる？」

「あと15秒であなた方は死ぬ」オルハムはジャケットの中で指をひねった。腕が急に強張った。彼は落ち着いてほんの少し笑みを浮かべた。「あなた方は引き金となる文字列について勘違いをしていらっしゃる。その時点で間違っているんですよ。ほうら、あと14秒だ」

2人は宇宙服の中で顔に驚きを浮かべ彼を見た。彼らは我先にと争いながらドアを裂くように開けた。空気が劈くような音を上げて虚ろな空間へと漏れ出した。ピーターズとネルソンは急いで船の外に飛び出した。オルハムは彼らの後を追いドアを掴んで引き込んで閉めた。自動気圧システムがピーピーと音を立てて空気を取り戻した。オルハムは身震いして息を吐きだした。

もう一步遅かったら—

窓の向こうで2人の男が分隊に加わる。隊は散り散りとあらゆる方向に走り去っていった。各々が自分の身体を投げ出して、地面に平伏していた。オルハムは操作盤の前に座った。彼はダイヤルを正しく回した。船が空中に浮きあがると下にいる男たちはよろよろと立ち上がり船を見上げ口を開けていた。「すまない」オルハムは呻いた。「けれど僕は地球に戻らないといけないんだ」彼は船を来た方の方角へと進めた。

夜だった。船の周辺ではコオロギが甲高く鳴き冷たい闇夜をかき乱していた。オルハムは映像スクリーンを覗きこんだ。次第に映像が形成されていく。通信は問題なく行われた。彼は安堵の息を漏らした。

「メアリー」彼は言った。女性は彼をじっと見つめた。彼女は息を呑んだ。

「スペンス！どこにいるの？何があったの？」

「教えることはできないんだ。聞いて、ゆっくり話す時間はないんだ。この通信もいつ妨害されるか分からない。プロジェクトの基地に行ってチェインバレン博士を連れてきてくれ。もし彼がそこに居なかったら医者なら誰でもいい。家に連れてきてそこに引き留めていてくれ。X線、透視装置、器具は全部持ってこさせるんだ」

「でもー」

「僕の言うとおりにしてくれ。急ぐんだ。一時間で準備を整えさせるんだ」オルハムはスクリーンの方に身を屈めた。

「大丈夫かい？今1人かい？」

「1人？」

「誰かと一緒だったりしない？ネルソンか…誰かが君に連絡を寄越さなかった？」

「いいえ、スペンス。何のことか分からないわ」

「分かった。1時間後に家で会おう。誰にも何も教えちゃ駄目だよ。チェインバレンをどうにかしてそこに連れてきてくれ。君が病気だと言ってもいい」

彼は通信を切って腕時計を見た。それからすぐに彼は船を出て闇夜へと繰り出していった。半マイルは進まなければならない。

彼は歩き始めた。

窓に灯りが一つ灯った。書斎の光だ。彼はそれを見てフェンスに身を任せてしゃがんだ。音も動きも一切ない。彼は腕時計を上に見て星灯りで時間を確認した。もう一時間が経とうとしていた。

通りに沿って小型自動車がやって来た。こっちに向かってくる。

オルハムは家の方を向いた。医者はずでに到着しているはずだ。彼は中でメアリーと待っているはずだ。ある考えが彼に浮かんだ。彼女は家を無事に出ることができたのだろうか？彼らが彼女の邪魔をしたかもしれない。僕は畏に飛び込もうとしているのではないだろうか。

けれど他に何ができる？

医者記録、写真、そして診断書があれば好機もある。証明の好機が。もし僕が検査してもらえれば、もし僕が診て貰える程までに生き延びればー

オルハムはそうすれば証明できる。それがおそらく唯一の方法だった。彼の唯一の希望は家の中にあった。チェインバレン医師は尊敬すべき人物だ。彼はプロジェクトの常勤医師だった。彼なら分かってくれる、渦中にあっても彼の言葉ならば意味を成すだろう。彼らのヒステリックや狂気を事実を以て治めてくれる。

狂気ーあれこそまさに狂気と言うのだろう。もし彼らが待ってくれさえしたならば、落ち着いて行動したならば、じっくりと時間をかけてくれたならば…。けれど彼らは待つことができなかつた。僕は死んでいたはずだ。瞬く間に、証拠も無く、裁判や検査が行われることも無く。如何に簡素な検査であっても事実を示しただろうに、彼らにはその時間さえ無かつたのだ。危険性にしか目を向けることができなかつた。危険性、そうたつたそれだけのことにしか。

彼は立ち上がり家へと向かつた。ポーチにまでやって来た。ドアの前で立ち止まり、耳を澄ませた。まだ音はしなかつた。家は完全に静寂に包まれていた。



静かすぎる。

オルハムはポーチに立ったまま動かなかった。彼らは中に潜んで音もたてずにいるのだ。どうしてだろうか？小さな家だ。ドアの向こう数フィートにメアリーとチェインバレン医師が立っているはずだ。なのに声も何も聞こえない、全く聞こえないのだ。彼はドアの方を向いた。毎朝毎夜数えきれない程通ったドアだ。

彼はドアノブに手をかけた。それからふと手を伸ばしてドアノブの代わりに呼び鈴に触れた。家の裏手の少し離れたところで呼び鈴が鳴り響いた。オルハムの顔に笑みが浮かぶ。人が動くのが聞こえたのだ。

メアリーがドアを開ける。彼女の顔を見た時オルハムは全てを悟った。

彼は走って、茂みへと身を投げた。保安局員がメアリーを押しつけて彼女越しに発砲する。茂みが割れて裂けた。オルハムは何とか家の脇へとすり抜けていった。彼は飛び上がり走って、暗闇に必死に逃げ込んだ。サーチライトが灯され、光の筋が彼を取り巻いて円を描いていた。

彼は道を横切りフェンスを乗り越えて乗越えた。飛び降りると裏庭の方へと向かった。彼の後ろには男たちが追って来ていた。保安局員たちは互いに大声でやり取りをしながら向かって来ている。オルハムはぜえぜえと息を切らし、肺は収縮と弛緩を繰り返していた。

メアリーの表情—オルハムはあの瞬間悟った。唇を結び、恐れ、戸惑った目。彼がそのまま進んでドアを押し開いて中に入っていたとしたら！彼らはあの通信を傍受してオルハムが通信を切るや否ややって来たのだ。恐らく彼女は彼らの説明を信じたのだろう。彼女もまた疑いもせずオルハムがロボットだと考えたのだ。

オルハムは走って走って走り続けた。保安局員から逃げ切って、置き去りにできそうだった。明らかに彼らは走るのが上手くなかった。彼は丘を越えた。あと少しで船へ戻れる。けれども次はどこに行くと言うのだ？彼は速度を落とし、やがて立ち止まった。すでに船は見えている。彼が停船した方の空に目を向ければその輪郭が浮かんでいる。住宅街が後ろに見え、彼は2つの居住地区の間の人々の住んでいない郊外まで来ていた。そこは森と荒野の始まりだった。彼は荒野から森林の中へと潜り込んだ。

彼が近づくと船のドアが開いた。

ピーターズが逆光で影を纏いながら中から出てきた。腕には重いボリス銃を構えていた。オルハムは立ち止まり、身体に緊張が走った。ピーターズは彼の周辺の闇をじっと見つめていた。「そこいらにいるのは分かっている」彼は言った。「出てきたまえ、オルハム。君は保安局員たちに包囲されているのだ」

オルハムは動かなかった。

「聞きなさい。我々は呆気なく君を捕まえることができる。君は自分がロボットであることをまだ信じていないようだね。君がメアリーに通信を取ったのも君がまだ人工記憶システムのまやかさに騙されているということなのだよ」

「けれどきみこそがロボットだ。君はロボットで、中には爆弾が存在するのだ。君だろ

うが他の誰であろうが引き金となる文字列を音声入力した瞬間、その爆弾は数マイル四方を破壊しつくすだろう。プロジェクトも、メアリーも、私たちは皆殺される。理解できるかね？」

オルハムは何も言わなかった。ただ耳を澄ませていた。男たちが森を抜け彼の方へと向かって来ている。

「もし君が出てこなければ、こちらから捕まえなければならない。それも時間の問題だ。もはや月面基地まで処理しに行くつもりもない。君は瞬く間に破壊され、我々は爆弾を解除する好機を掴み取らなければならない。動員可能な保安局員を全員この地区に配置した。郡全体が余す所なく搜索されている。君が逃げることのできる場所などもはや存在しない。この森の周辺にも武装集団の捜査網が張られている。最後の 1 インチを調べつくすまで 6 時間といったところか」

オルハムは動き出した。ピーターズは今なお喋っている。彼にはオルハムが見えていない。暗闇が深く誰も目視で捉えることができないからだ。けれどピーターズの言うことは正しかった。オルハムが逃げることのできる場所などもはやなかった。彼は住宅地を超えて森が始まる郊外までやって来た。しばらく身を隠すことはできようが、結局は捕えられてしまうだろう。

もはや時間の問題だ。

オルハムはゆっくりと森を歩いて進んだ。1 マイル 1 マイル、彼らは郡のあらゆる場所に見当をつけ、暴き、搜索し、じっくり調べ、そして吟味していくのだ。捜査網はじわじわと近づくことを止めず、彼を袋小路に追いやっていく。

残されている手段は何か？逃亡の一筋の希望である船も失ってしまった。彼らはオルハムの家に行ったのだ、彼の妻もオルハムが殺されてしまったということに疑うことなく信じて当局側に与している。彼は拳を握りしめた。どこかに宇宙人側の事故にあった宇宙船がある。その中には件のロボットが残っているだろう。どこか近くでその船が事故にあって大破したはずだ。

ロボットも中にいる、壊れているはずだ。

微かな希望が彼の頭に浮かんだ。その残骸を見つけることができればどうだ？彼らに見せることができれば、難破船の残骸を、ロボットを一

けれどどこなのだ？どこで見つけることができる？

彼は歩き続けた。考えは浮かばない。どこか、恐らくそう遠くない場所。船はプロジェクトの近くに着陸しただろう。ロボットは残りの距離を歩いて詰めるつもりだったのだから。オルハムは丘に登り見回した。事故があつて燃えたのは。何か手掛かりは、ヒントはないのか？何か読まなかったか？何か聞かなかったか？近隣、歩いて行ける場所。住宅地ではなく、人の居ない離れた場所。

突然オルハムは笑みを浮かべた。事故、火事—

サットンの森だ。

彼は歩みを速めた。

朝になった。荒れた木々の中に木漏れ日が差し込んで、空き地の隅でうずくまっている男を照らしていた。オルハムはたまに空を見上げては耳を澄ませた。あれらはそう遠くない。あと数分もすれば辿り着く。彼は笑った。

彼が下を見下ろすと、が空き地の上、そしてかつてサットンの森であったらう切り株の虚の中に焼き崩れた残骸が散らばっていた。太陽光の中でそれは微かに薄暗く煌めいていた。それを見つけるのに大して苦労はしなかった。サットンの森は彼が良く知る場所だった。人生で何度も登ったものだ。その時彼はもっと若かった。残骸が見つかりそうな場所にも見当がついていた。そこには突き出した隆起が唐突に、そして不意に現れるのだ。

下降していく船にとって、サットンの森に馴染みがなければ、それを避けることは容易ではない。そして今彼はしゃがんで船を、もしくはかつてその姿をしていたものを見下ろしていた。

オルハムは立ち上がった。ほんの少し離れたところで彼らが共にこちらに向かって来ている音がする。低い調子で会話している。彼は緊張した。全ては誰が最初に自分を見つけるかにかかっている。もしネルソンであれば、そこで終わりだ。ネルソンは間髪入れず発砲するだろう。彼らが船を目にする前に死んでしまう。しかしもし彼が大声を出して少しでも彼らを遠ざける時間があれば—その時間さえあればいい。彼らが船を目にさえすれば身の安全は保障される。

けれど彼らが先に発砲すれば—

炭になった枝が折れた。ある姿が現れる。不安げにこちらに向かって来ている。オルハムは深呼吸した。残されたのは数秒のみ、人生最後の数秒になるかもしれない。彼は両腕を上げた、心を決めた様子で凝視した。

それはピーターズだった。

「ピーターズ！」オルハムは両腕を振った。ピーターズは銃を取り出し、彼を狙いを定めた。「撃たないでくれ！」声が震える。「待ってくれ、僕の後ろを見てみる、向こうの空き地だ」

「見つけたぞ」ピーターズは叫んだ。保安局員たちがオルハムを囲む炭になった森林からあふれるように飛び出してきた。

「撃つな。向こうを見ろ。船だ、突起がついている。宇宙人勢力の船だ。見ろ！」

ピーターズは躊躇した。銃が震えた。

「銃を下ろせ」オルハムはまくしたてた。「ここにあると思っていたんだ。炎上した森にな。もう信じてくれるだろ。船の中にはロボットの残骸もあるはずだ。見てみてくれ、お願いだから」

「下に何かあります」ある男が慎重に言った。

「奴を撃て！」一人が叫んだ。ネルソンだ。

「待て」ピーターズが鋭く答えた。「私が責任者だ。誰も撃つな。恐らく奴が言っていることは本当だ」

「撃て！」ネルソンが言った。「奴がオルハムを殺したんだ。いつでも奴は俺たちを殺せる。もし爆弾が起動すれば—」

「黙れ」ピーターズは坂に向かって進んでいった。彼は見下ろした。「あれを見ろ」上にいる2人の男性に向かって手を振った。「降りてあれが何か見てこい」

男たちが坂を下りて空き地を通り過ぎていった。彼らは屈んで船の残骸を覗き込んだ。「どうだ？」ピーターズが呼びかけた。

オルハムは息をついた。彼は微かに笑った。そこにあるはずだ。自分で確認する時間はなかった。けれどあるに違いなかった。急に疑念が彼を襲った。ロボットが逃れられる程に生き延びていたら？奴の身体が完全に粉々になって、炎で灰になっていたら？

彼は唇をなめた。汗が額から零れる。ネルソンはじっと彼を見ていた。彼の顔は激怒していた。胸は上下していた。

「殺せ」ネルソンは言った。「殺される前に」

確認に行った2人の男性が立ち上がった。

「何があった？」ピーターズは言った。銃をずっと構える。「何かあったのか？」

「何か形のあるものが。突起のついた宇宙船ですね。横にも何かある」

「見てみよう」ピーターズが大股でオルハムの横を通り抜けていった。オルハムは彼が丘から降りて男たちの所に向かうのを見た。他の者も彼に続いてそれを覗き込んだ。

「何かの身体のような」ピーターズが言った。「見ろ！」

オルハムが彼らの下にやって来た。彼らは輪を作って見下ろしていた。

地面の上には異様な形をした何かが奇妙に折れたりねじ曲がっていた。それは恐らくだが人間のようにも見えた。異常に折れた部分を除くと、腕や足が四方に飛び散っていた。口は開き、目は虚ろに一点を見つめていた。

「停止した機械のようだ」ピーターズが呻いた。

オルハムは弱々しく笑った。「それで？」彼は言った。

ピーターズは彼を見た。「信じられん。君はずっと本当のことを言っていたのだな」

「そのロボットは私の所には辿り着かなかったのです」オルハムが言った。彼は煙草を取り出して火を点けた。「船が事故にあった時に壊れたんです。あなたたちは戦争に躍起になっていて誰も郊外にある森が急に火事にあって燃え上がったことに疑問を抱かなかった。もうお分かりでしょう」

彼は立って煙草を吸いながら男たちを見ていた。彼らは船からその異様な残骸を運び出していた。本体は固く、腕や足は動かなくなっていた。

「爆弾も見つかることでしょう」オルハムは言った。男たちはその身体を地面に投げ出した。ピーターズは屈みこんだ。

「爆弾の端が見えたかもしれん」彼は手を伸ばし、身体に触った。

死体の胸の部分が開いていた。大きく裂けた穴の中に何かきらっと光った。金属の何かだ。男たちはその金属を一言も発さずにじっと見ていた。

「それがまだ機能していれば我々は皆死んでいただろう」ピーターズが言った。「その金属の箱のことだ」

沈黙が訪れた。

「私たちは君に借りができたな」ピーターズはオルハムに言った。「君にとってこれは悪夢だったに違いない。もし君が逃げ出していなければ、私たちは—」そこで言葉を切った。

オルハムは煙草を取り出した。「もちろんロボットが私の元に現れなかったことは知っていました。けれど証明する方法がなかった。迅速に物事を証明するのが不可能な場合というのがあるのです。酷く険しい道でした。私が私だと証明する方法なんてなかった」

「休暇はどうかね」ピーターズは言った。「私たちが君に一か月の休暇を取れるよう尽力しよう。落ち着いて羽を伸ばせるだろう」

「私は今すぐに家に帰りたい」オルハムが言った。

「よし、分かった」ピーターズが言った。「何でも言いなさい」

ネルソンは地面に屈みこんで死体の脇にいた。彼は胸の中の金属の煌めきに手を伸ばした。

「それに触るんじゃない」オルハムは言った。「それはまだ爆発するかもしれないんだ。解体部隊に後の処理は任せた方が良い」

ネルソンは何も言わなかった。彼は急に死体の胸へと手を突っ込みその金属の取っ手を掴み、そして引き抜いた。

「何をやっているんだ!？」オルハムが叫んだ。

ネルソンは立ち上がった。彼は金属の物体を握っていた。恐怖から顔は虚ろだった。それは鋼鉄製のナイフで、宇宙人製の突起のついたものだった。そしてそのナイフは血に染まっていたのだ。

「これがあいつを殺したんだ」ネルソンは囁いた。「俺の友人はこのナイフで殺されたんだ」彼はオルハムに視線を向けた。「お前がこいつで俺の友人を殺して船から投げ捨てたんだ」

オルハムは震えた。歯がガタガタと音を立てる。ナイフから死体の方へと目を向けた。「これがオルハムなはずがない」彼が言った。彼の精神はぐるぐると疲弊し、あらゆるものがひっくり返った。「僕が間違っていたのか？」

彼はぼかんと口を開けた。

「でももしあれがオルハムだったら、それじゃあ僕は間違いなく—」

彼は最後まで言うことはできなかった。それは最初の文字列だけだった。その爆発ははるか遠くのケンタウルス座α星からも見えた。